

「地域における子育て支援」

—— 子育てサークルが持つ意味・役割の探求, そして、その「場」の活用について ——

M1365318 津 田 亜矢子

1. 問題と目的

仕事を持たずに家事・育児に専念する親は、乳幼児をもつ家庭に多く見られる。そして、閉塞した状況のなか独りで子育てを担っており、子育てに対して負担を感じていることが先行研究から明らかとなっている。したがって、これらの点に配慮した支援が必要と考えられるが、国による少子化対策としての子育て支援策は、仕事を持つ親が子育てと仕事を両立しやすくするための支援が中心である。仕事を持たずに家事・育児に専念する親に対する公的な支援は行われていない。

このような状況で、支援に代わる役割を果たしていると考えられるのが、乳幼児を持つ親が集い交流する子育てサークルである。子育てサークルは、親子が家庭外に出る機会を作ると同時に、他の親子との交流によって子育てに対する負担感を軽減する役割を果たしていると考えられる。それに加え、グループを形成することによって、そこから新たな地域コミュニティが作られている可能性も考えられる。

このように、子育てサークルは地域で支援的な役割を果たしていると考えられるものの、その実態はあまり知られていない。したがって、本研究では、実態を把握することから始め、サークルの持つ意義や役割について検討する。また、実態把握をとおして、サークル活動が持つ利点や問題点を整理し、今後の課題について考察する。

2. 広島県内の子育てに関するサークル概況

— 予備調査

広島地域のサークル概況を把握するため、ひろしまこども夢財団にインタビュー調査を行った。広島県下だけでも同財団には201の子育てサークルが登録されていることが明らかとなった。

3. 代表者を対象としたサークル概要・発足経緯に関する調査 — 第1研究

広島市内で活動を行う14名のサークル代表者にサークル概要、発足の経緯などについて半構造化面接を行った。全員が2～15歳の子どもを持つ女性であった。

サークル概要を整理したところ、サークルの多くは平日の午前中、仕事を持たずに家事・育児に専念する親が未就園児を連れて集まり、公共施設で活動を行っていたが、活動内容や活動形態に違いがあることが判明した：(1)未就園児をもつ家事・育児に専念する親が子どもとともに集い、幼稚園と同様のカリキュラムを親子で体験し、親同士・子ども同士が交流することを目的とする「育児サークル」、(2)子育てが一段落した

代表者が中心となり、子育て中の親に対する支援を目的として、親子が集える場を提供する「支援サークル」の2つに分類された。

育児サークルは親子それぞれの友人を見つけるためのピアグループ的な役割を果たし、友人や子育て情報を得る場を必要として自主的に発足した経緯が明らかとなった。一方、支援サークルは、自らの子育てに対する否定的な感情や経験が発端となり、自主的にサークルを発足させていた。そして、親の子育て負担を少しでも和らげようとする役割を担っており、支援に対する目的意識が明確に認められた。

4. 参加者を対象としたサークル利用に関する調査 — 第2研究

サークル活動に関する質問紙調査を行い、13サークルの参加者109名から回答が得られた。参加者は、0～10歳の子どもを持つ25～39歳までの女性であった。質問内容は、参加理由、サークルの利点・問題点、希望の活動、参加時の子どもの様子、参加することによる自分の変化についてであった。

それぞれの質問項目ごとに分類を行った後、質問項目間の関連性に着目して分析した結果、参加者から得られた回答は、サークル活動そのものに関する内容（活動内容・活動の形態・サークル概要）と、サークルに参加することによってもたらされる付随的な事象（人間関係・子どもの様子・参加時の心理）に分類された。これら2つの内容から、子どもを持つ親はサークルへの参加によって、子育てにおける悩みや不安などが解消され、社会との接点を確認ができるだけでなく、子どもの楽しむ姿を見ることで、改めて子育ての喜びを味わうことができる場であることが確認された。

5. 総合考察

以上の結果から、子育てサークルは、一人一人のメンバーがお互いに援助し合うピアサポート的役割を持ちながら、子育てを介した地域づくりがサークル活動をとおして行われていると考えられる。したがって、サークル組織を支援することで、仕事を持たずに家事・育児に専念する親に対する支援と、さらなる地域づくりに貢献することができる。

本研究では、子育てサークルの実態把握と整理によって、その意義や役割、サークルを支援する必要性が見出された。しかし、サークル不参加の家事・育児に専念している親への支援については検討されておらず、今後の課題である。